

お宝探し

坂東誠一

登場人物

堀川優 (16) 高校生

(10) 小学生

宮田杏 (24) 優の姉

百万遍正也 (45) (39) 優の父

定食屋の旦那 (60)

民宿のおかみ (60)

バイク屋の親父 (60)

○百万遍正也の遺影

故人とは思えないほど血色のいい顔。

歯茎まで剥き出して笑っている。

優の声「親父が死んだ。……らしい」

○斎場・外

火葬場の煙突から煙が青空に立ちのぼっている。

優の声「らしいってのは、俺がチョコで見ただ訳じゃないからだ」

マウンテンバイクに跨がったままの堀川優（16）、煙の行方をぼんやりと見ている。

杏の声「なあ、あんた」

優、声の方を振り返る。

喪服姿の宮田杏（24）がゆっくりと歩いてくる。

杏「マサル君やろ」

優「誰？」

杏「私？ アン。宮田杏」

優「宮田……」

杏「いやあ、もう会えへんかと思うたわ。お葬式も出たないくらい、あの人のこと嫌いなん？」

優「……」

杏「そら、そうか。あんた置いて勝手に出ていった人やもんなあ」

杏、自分の鞆をこそごと探り出す。

杏「実は見てほしいもんがあんねん」

優「あんた、ひよっとして親父の愛人かなんか？」

鞆から小型のデジタルビデオカメラを取り出す杏。

杏「これこれ」

優「人の話聞けよ！」

杏「（にいと笑い）その前にコレ見てくれへん？ そやないと話始まらへん」

優「（杏を睨みつけ）……」

杏、涼しい顔で再生ボタンを押す。

○百万遍のビデオレター

映し出される百万遍正也（45）、ベッドの上で胡座をかいて座っている。

病人とは思えないくらい顔色もいい。

百万遍「杏、俺はいよいよあかんらしい。好き勝手に生きてきて俺自身悔いはないけど

杏とマサルには悪かったと思ってる。そこでや、せめて二人には俺のお宝を遺して  
いくことにする。お宝のありかはマサルに渡した地図に印が付けたある。いつか  
一緒に自転車で走って約束したとこや。二人で探してみてくれ。埋めた場所はこ  
の景色のとこや」

百万遍が画面から消え、夕焼けの海が望める草原の高台が映る。星を横一列に並べ  
たように水平線が輝いている。

イカ漁の漁り火だ。

と、突然画面が止まる。

優の声「あれ？」

○斎場・外

杏「(カメラを仕舞いながら) 見せるんはここまで」

優「なんで」

杏「あほちゃう。全部見せたらお宝丸々あなたに持っていかれるやん」

優「(眉をひそめ) ……」

杏「どう？ 一緒に行かへん？」

優「あなた、マジで言ってる？」

杏「うん。むっちゃマジ」

優「ばかじゃねえ。お宝なんかあるわけねえだろ。親父はね、昔から嘘ばっかついて借  
金つくる、女つくるで、家出てったんだ。そんな奴信じられつかよ。あんただって  
痛い目に遭ってきたんだろ」

杏「(鼻で笑い) まあなあ。けど、今度は最後やしホンマかもしれへん」

優「……」

杏「わかった、しゃあない。一緒に行くのはあきらめたげる。けど、地図は貸してや」

優「待てよ。誰が地図貸すなんて言ったよ」

杏「え？ 信じてへんにやる、お宝の話。そしたら地図必要ないやん」

優「……」

杏「なんやな、はつきりせんなあ。ま、ええわ。ゆっくり考え。行くとしたらどうせ夏  
休みやし」

優「なに勝手に決めてんだよ」

杏「また連絡するわ」

と、優に背を向け歩き出す。

優「待てよ！ 俺、マサルじゃねえから」

杏「(足を止め) え、マサルやないの」

優「それは親父が勝手にそう呼んでるだけ。戸籍はユウ。堀川優」

杏「(ぶつと吹き出し)あの人らしいなあ。ほな、私も教えたい。私はあの人の愛人  
やない」

優「？」

杏「娘。腹違いやけどあんたの姉やから」

優「！」

杏、優に構わず歩き出す。

優「嘘ついてんじゃねえよ！」

杏「(振り返り)たまには人の言うこと信じよし！」

去っていく杏。

優、その姿を呆然と見送る。

優の声「親父を見送った日、俺は生まれて初めて姉に出会った」

○団地・全景(夕)

夕日に染まる古びた団地。

○同・堀川家・ダイニング(夕)

誰もいない。

テーブルの上にはメモ用紙が置いてあり、そこには「優、おかえり。母さん今日も  
残業だから、先に夕食済ませてね」と書いてある。

優の声「これだ！」

○同・同・優の部屋(夕)

スチール製のスタンドにマウンテンバイクが掛けられている。

絨毯の上には、優と百万遍が一緒にサイクリングに出掛けた時のスナップ写真や地  
図が散乱している。

パイプベッドの上に胡座をかいている優、目の前に広げた地図を見つめている。

地図に載っているのは佐渡島。

姫崎、沢崎、春日岬、大野亀の四ヶ所に丸印が付いている。

その脇に赤いマジックで「優に見せてやりたい風景」とある。  
それをじつと見つめる優。

タイトル「お宝さがし」

○新潟駅・構内

タンクトップ、ハーフパンツ姿の優、大きな輪行袋を肩から襷がけに下げて歩いて

くる。人々が振り返っていくが、気にせずその中を突っ切っていく。

○開かれる輪行袋

マウンテンバイクのつややかな青い車体が現れる。

○新潟駅・駅前ロータリー

マウンテンバイクを必死で組み立てている優。ハンドルをセットした後、車体を天地逆さまに置き、前後タイヤを

セットしていく。

杏の声「へえ、やるやん」

優、声の方を振り返る。

ポロシャツ、チノパンツ姿でデイパックを背負った杏が歩いてくる。

杏「久しぶり」

優「あんた、アシは？」

杏「あいつ」

杏の指差す方に、原付きスクーターが停めてある。

杏「駅前まで借りてきた」

優「チャリじゃねえの」

杏「なんでわざわざそんなしんどい思いせなあかんの」

優「……」

杏「持つてきた？ 地図」

優「ああ。あんたこそビデオは？」

杏、デイパックをぽんと叩く。

○信濃川沿いの道

荷物満載のマウンテンバイクに乗った優が走っていく。

その後を杏のスクーターが続く。

二人が走り去った先にフェリー乗り場を示す青い標識が見えてくる。

○新潟港・フェリー埠頭

出航する大きなフェリー、広い海原へと進み出す。

○フェリー・甲板

ベンチの両端に座っている優と杏、二人とも携帯電話を手にしている。

と、まるで示し合わせたように携帯を切る二人。

杏「(優へ身体を寄せ)お母さん？」

優「関係ねえだろ。そっちこそ誰だよ」

杏「お母さん。弟と一緒に言うたら、びっくりしてたわ」

優「ばかじゃねえ。なにばらしてんだよ」

杏「ええやん、ほんまのことやもん。あんたこそお母さんになんて言うてきたん？」

優「塾」

杏「は？」

優「塾の夏合宿だよ」

杏「アホちゃう。そんなんすぐばれるわ」

優「なんだと」

杏「なんやの、やる気？」

睨み合う二人。

男の声「見えてきたぞ！」

優と杏、声の方を見る。

午後の陽光を浴びて輝く海原の果てに青い島影が姿を現わしている。

杏「あれ？」

優「ああ」

二人、大きくなっていく青い島影をじっと見つめる。

○両津港・フェリー埠頭

到着しているフェリー。

大きく開いた車の乗降口から次々と上陸していく車に混じって、マウンテンバイクの優とスクーターの杏が上陸していく。

○海沿いの道

疾走してくるマウンテンバイクの優。

続いてスクーターの杏、優を煽るようにエンジンを蒸かしながら蛇行する。

杏「遅いなあ。時速15キロ」

優「うぜえなあ！ 先行けよ」

杏「どこ行くんか、わからへんもん」

優「姫崎！ この道まっすぐ。標識も出てるはず！」

杏「あ、そ」

速度を上げる杏のスクーター、あっという間に走り去る。

優「(舌打ち) くそっ！」

○姫崎・駐車場

並んで停めてあるマウンテンバイクとスクーター。  
杏の声「はい、消えた」

○同・公園

ビデオを見ている杏。  
隣で地図を見ている優、「姫崎」に×印を入れる。  
二人の先には白い灯台と穏やかな海。

○姫崎・キャンプ場(夕)

小さなテントの前、優がコッヘルで米を炊いている。  
少し離れたところに杏、恨めしそうに優を見ている。  
杏「どうしよつかなあ、今日の夕食」  
優、杏を無視してオイルサーデインの缶詰を取り出す。  
杏「ひとつぱしりしてレストランでも探してこうかなあ」  
優、缶詰を開けようとするが、プルトップが途中で折れてしまう。

杏「あーあ」

舌打ちする優、鞆の中をこそこそと探り始める。

杏「(歌って) 探し物はなんですかあ、見つけにくい物ですかあ」

優「(杏を睨みつけ) ……」

歌うのを止める杏、アーミーナイフを優に差し出す。

優「!」

杏「お宝を見つけるまではお互い助け合いの精神で行かへん？」

優「……」

○同・灯台(夜)

規則正しく光を放っている。  
杏の声「お宝ってなんやと思う？」

○テント・中(夜)

規則正しくうつすら明るくなる。  
それぞれ自分の寝袋に入っている優と杏。  
優「知るかよ。だいたい、あるかどうかもわかんねえのに」  
杏「まだそんなこと言うてんの」  
優「……」



杏「あの人、周りをびつくりさせんの好きやったやろ。今回最後やし、気合入れて仕掛け  
てるような気がすんねん」

優「だいたいけど」

杏、ごそごそと動き出す。

杏「なあ、もうちよつとそつちいけへん？」

優「無理」

杏「ああ、せま。こんなんやったら、寝られへんわ」

優「ヤなら出てけよ。助け合いつていうから入れてやってんだぜ」

杏「あんた、ほんま鬼やなあ」

優「俺が鬼なら、あんたも鬼だろ」

杏「もうええわ（と背を向ける）」

優、鼻で笑う。

○同・外（深夜）

風に揺れるテント。

中から鼾が聞こえてくる。

○同・中（深夜）

優、がばつと身を起こし杏を睨む。

ぽかんと口を開いたまま鼾をかいている杏。

優「なにが寝れねえだよ」

寝袋に入ったまま頭と足をさかさまにして寝直す優。

と、その時、ぶつというおならの音。

優「……マジかよ」

○姫崎・キャンプ場（朝）

キャンプを目深に被る優、荷物満載のマウンテンバイクに跨がる。

杏もメットを被りスクーターに乗る。

走り出す二台。

○海沿いの道

陽炎が立つアスファルトの道。

優のマウンテンバイクが走っている。

キャンプを目深に被っているが、ばてているのがわかる。

木陰で停車している杏が見えてくる。

杏「なあ！ こつちに荷物積み換え！」

無視して通過する優。

杏、スクーターを走らせ優の前へ飛び出していく。

慌ててブレーキをかける優。

優「危ねえな！」

スクーターを降りる杏、優のマウンテンバイクから荷物を外し始める。

優「なに勝手なことしてんだよ」

杏「どうでもせんと言うこと聞かへんやろ」

スクーターのキャリアに荷物を手際良く括りつけていく杏。

優、無然と水筒の水を飲み出す。

○スーパーマーケット・前

マウンテンバイクとスクーターが停められてある。

その脇にべた座りしている優、バナナを頬張りながら地図を見ている。

杏の声「お待たせ」

顔を上げる優。

ビニール袋を下げて杏が出てくる。

杏「ばてんように今晚は私がちやんと作っただげしな」

優「喰えるもん出してくれんだったらな」

すかさず杏の拳が飛んでくる。

慌ててそれを除ける優。

優「手のはえんだよ！」

杏「あほ」

突き出された杏の拳がゆっくり開く。

掌には耳栓。

杏「ばてんように今晚はちやんと寝なな」

優「……」

○山あいの上り坂

マウンテンバイクの優、歯を食いしばり。ペダルを踏み続ける。

踏む度に滴り落ちる汗。

そんな優の背を見ながら、とろとろとスクーターの杏が続いていく。

○山あいの下り坂（夕）

奇声を上げながら駆け降りてくるマウンテンバイクの優とスクーターの杏。

視界が開け大きな海が広がる。

その海に突き出すように延びる岬。

突端には白い灯台が。

優「出てきた！」

杏「沢崎？」

優「そう！」

岬に向かって駆け降りていく二台。

○沢崎・灯台下（夕）

ビデオを見ている杏、首を横に振る。

隣で地図を見ている優、「沢崎」に×印を入れる。

優「くそっ！ 逆から回るんだった」

杏「まあええやん。逆から回ってたら、こんなきれいな景色見られへんかってんもん」  
優「……」

二人の目の前には、西日を受けて輝く海原が広がっている。

海から吹いてくる潮風を受けながら、その景色をじっと見る二人。

○コッヘルの中

ヘッドランプの光の中、具だくさんの豚汁。

杏の声「どう？」

優の声「すげえ」

○素浜・キャンプ場（夜）

ヘッドランプを付けている優と杏、コッヘルを囲んでしゃがみ込んでいる。

隣には、テントとマウンテンバイクとスクーター。

○夜空

無数の星。天の川がくつきりと出ている。

○テント・中（夜）

相変わらず豪快に鼾をかいている杏。

隣の優、耳栓をセットしようとするが、ふと手を止める。

口が開いたままの杏のデイバックからビデオカメラが覗いている。

優、ちらっと杏を見る。

杏、鼾をかいたまま。

優「……」

○百万遍のビデオレター

いきなり映り出す百万遍。

百万遍「杏、お前は一人やない。マサルがおる。マサルのこと大事にせえ。そしたら、あいつもお前のこと大事に思ってくれるはずや」

○テント・中(夜)

ビデオカメラのモニターをじっと見ている優。

と、突然杏の躰が止む。

優、慌ててビデオカメラの電源を切りデイバックにそれを戻す。

再び躰をかきだす杏。

優「(杏を見つめ)……」

○素浜・キャンプ場(朝)

色とりどりのテントが朝日を受けて並んでいる。

○テント・中(朝)

眠っている優、外から聞こえてくる杏の笑い声で目を覚ます。

耳栓を耳からはずす優。

杏の声「ええ、そうです。優君は苦手な数学に一生懸命取り組んでいます。はい、御心配なく。あさつてには無事お返しいたします」

優「!」

慌てて飛び起きる優。

○同・外(朝)

飛び出してくる優、杏から携帯電話をひったくり、それを耳に当てる。

すでに切れている。

杏「なにすんの!」

優「それ、俺のセリフだろ。なに人のケータイ出でんだよ」

杏「あんたが起きひんし、代わりに出たげただけやん。出えへんかったら、あんたのお母さん、心配するやろ」

優「ぎげんな!俺のケータイに知らねえ女が出るほうがよっぽど心配だろうが」

杏「そんなことないわ。あんたのお母さん、私のことカンペキ塾の先生で思い込んでたも  
ん」

優、思わず拳を握りしめる。

杏「(身構え) なに。やる気？」

優「(溜め息をつき) ……」

杏「あれ、もう戦意喪失？」

優「るせえ！」

### ○海沿いの道(朝)

未舗装の小道を走ってくるスクーターの杏。

続いてマウンテンバイクの優、前を走る杏の背中を見ている。

百万遍の声「杏、お前は一人やない。マサルがおる。マサルのこと大事にせえ。そした

ら、あいつもお前のこと大事に思ってくれるはずや」

優、スピードを上げ杏の横に並ぶ。

優「なあ！」

杏「？」

優「母親に連絡しなくていいのかよ」

杏「……」

優「おとといフェリーで電話しただけだろ」

杏「大丈夫！ ウチはあんたんとこみたいに過保護ちゃうねん」

優「……」

杏「そんなことより、ほんまにこの道でおうてんの？」

優「たまには人の言うこと信じろ！」

杏「(大声で笑い) それっていつかの逆襲やな」

速度を上げる杏、再び優の前へ。

優「……ったく」

### ○定食屋・前

優のマウンテンバイクと杏のスクーターが止められている。

杏の声「すいません！ 御飯おかわり！」

### ○同・中

カウンター席の優と杏が昼飯を食べている。

優「食い過ぎじゃねえの？」

杏、返事もせず味噌汁を啜っている。

優「後で腹痛くなっても知らねえからな」

店の旦那(60)が厨房から茶碗を差し出す。

旦那「お兄さん、大丈夫だ。佐渡の米は日本一だから」

杏、茶碗を受け取り、おかわりの御飯を食べ出す。

優「どういう意味？」

旦那「自然が厳しいから佐渡の田んぼは機械が入らねえ所が多いんだ。その分手間暇かけ  
つから、おっそろしくうまくなるんだ」

杏、食べながら頷く。

優「おじさん、全然答えになってねえよ」

旦那「え、そうかい？」

杏、黙って食べ続ける。

○海沿いの道

停めてある杏のスクーター。

優はマウンテンバイクに跨がったまま無然としている。

優「（茂みの奥に向かって）まだかよ！」

杏の声「もう！ 黙ってて」

優「（溜め息をつき）わかりやすいカラダ」

杏の声「なあ！」

優「なんだよ！」

杏の声「紙！」

優「あ？ デイパックの中にあるって言ってただろ」

杏の声「足りひんの！」

優「……ばかじゃね」

杏の声「頼むわ！」

マウンテンバイクから降りる優、鞆からポケットティッシュを取り出す。

杏の声「はよして！」

優「それが人にお願ひする物の言い方かよ」

杏の声「早くお願ひします！」

優「しようがねえな」

優、茂みの奥に向かってティッシュを放るが、ティッシュは途中の木枝に引っ掛か  
ってしまふ。

優「ったく」

優、小枝に引っ掛かったティッシュを取りに茂みの中へ。

杏の声「エッチ！ 変態！」

優「ざげんな！」

○春日岬・駐車場

小高い丘の上。

マウンテンバイクの優とスクーターの杏がやってくる。

優「(マウンテンバイクを降り) 着いたあ」

スクーターを降りる杏、メットをはずし、デイパックを開けるが

杏「！」

デイパックを慌てて探り出す杏。

優「なんだよ」

杏「ないねん」

優「なにが」

杏「ビデオ」

優「！」

優、杏のデイパックをひったくる。

杏「ちよっと！」

優、デイパックの中を一瞥するや、その中身を地面にぶちまける。

杏「なにすんの！」

優「んなこと言ってる場合かよ」

優、散乱した荷物を確かめながら、デイパックに戻していくが、ビデオカメラは見当たらない。

杏「……あそこや。あそこで落としたんや」

優「あそこ？」

杏、素早くメットを被りスクーターに乗り込む。

優「おい！」

杏「わからへんの！ うんこの場所！」

優「！」

猛然と走り出す杏のスクーター。

優「待てよ！」

優、散乱している荷物をデイパックに突っ込みながら

優「ったく！」

○海沿いの道

爆走していく杏のスクーター。

遅れて優のマウンテンバイク。

優「(ペダルを踏みながら) くそ！ くそ！ くそ！ くそ！」

○さっきの「うんこ」の場所

マウンテンバイクの優が息を切らして走ってくる。

スクーターが止められている。

杏の姿はない。

マウンテンバイクを降りる優。

優「(茂みの奥に向かって) どうだよ!」

杏の声「あらへん!」

優「……つたく」

優、茂みの中へ分け入ろうとするが

杏の声「来たらあかん!」

優、足を止める。

優「ほんとにそこかよ!」

杏の声「ここしか考えられへん!」

優「言い切れんのかよ」

杏の声「さっき紙出した時はあったもん」

優「その後は! デイパックのチャックが開いたままだったか」

杏の声「絶対ない! 閉めたもん」

優「じゃあ、なんでねえんだよ!」

杏の声「そんなん、私かてわからへんわ!」

優「(溜め息をつき)……」

× × ×

地面に座り込んでいる優。

茂みの中から杏が出てくる。

杏「もうええわ。ビデオ、あきらめる」

優「あ?」

杏「その場に立ったらわかるわ。私、何回もビデオ見たんやもん。頭に焼きついてる」

優「ばかじゃね? 岬の景色なんてどこでも似たようなもんだろが。ビデオなしで区別で

きる訳ねえよ」

杏「あと二ヶ所やん」

優「なに言ってるんだよ。この先はアップダウンの激しい道が続くんだけ」

杏「大丈夫。私のこと、信じよし」

優「!」

○(優の回想) 路上(夕)

夕日に延びるふたつの影。



昔の優（10）と百万遍（39）。

百万遍「大丈夫や。俺のこと、信じろ」

優、黙ったまま俯く。

百万遍が優から離れていく。

俯く優の目から涙がこぼれる。

○さっきの「うんこ」の場所

黙って立ち上がる優、スクーターの荷物を外し始める。

杏「なんなん？」

荷物を抱える優、マウンテンバイクのもとへ。

優「俺、降りるから」

杏「えっ…」

優「止めんだよ」

地面に放り出される優の地図。

杏「!」

優、荷物をマウンテンバイクに取り付けていく。

杏「なんで？」

優、黙ったまま手を休めない。

杏「なあ！ なんか言うて！」

優「楽観的なことばっか言って周りに迷惑をかける」

杏「？」

優「で、困ったことになったらいい加減なことばっか言って、どうにもなんなくなったら

逃げ出しちまう」

杏「なに？ どういうこと？」

優「そういう奴とは二度とかかわんない。そう決めてやってきたんだ。なのに、こんなと

ころまで来ちまって……。ほんと、ばかだよ、俺は」

マウンテンバイクに跨がる優。

優「あんた、あの人にそっくりなんだよ」

杏「!」

マウンテンバイクの優、走り出す。

と、その前に杏が両手を広げて飛び出してくる。

急停車する優のマウンテンバイク。

優「危ねえだろ！」

杏「（両手を広げたまま）私は逃げたりせえへん！」

優「……」

杏「ビデオをなくしたことは謝る。迷惑かけてごめん。けど、最後まで一緒につき合おうて」  
優「……」

杏「今帰ったら絶対後悔すんで」

マウンテンバイクの優、杏をかわして走り出す。

杏「あんたこそ、あの人にそっくりやん！」

優、振り返らず走り去る。

○海沿いの道

疾走するマウンテンバイクの優、前だけを見据え走り続ける。

× × ×

(フラッシュ)

さっきの杏。

杏「あんたこそ、あの人にそっくりやん！」

× × ×

優のマウンテンバイク、速度が落ちていき停車してしまふ。

優「……」

と、突然路面に散り出す水玉模様。

優「！」

空を仰ぐ優。

鉛色の空から落ちてくる大粒の雨。

優、レインウエアを素早く着込む。

と、鞆からピンクのレインウエアが転がり落ちる。

優、それを拾い上げ背後を振り返る。

誰もいない。

路面があつという間に濡れていく。

優「……」

じつと道の先を見つめる優。

優「くそっ！」

激しくハンドルを切る優、今来た道を猛然と引き返していく。

○さっきの「うんこ」の場所

雨の中を疾走してくるマウンテンバイクの優、速度を落としていく。

杏が雨に打たれたまま立っているのが見えてくる。

杏、優に気づき笑みを見せる。

杏の前で停車する優。

杏「帰ってきてくれると思った」

優「……これ持っていつちまったからだろ」

差し出されるピンクのレインウェア。

それを受け取る杏、代わりにシャツの中から優の地図を差し出す。

杏「(笑って) どう? 偉いやろ」

優「……ったく」

○春日岬・駐車場(夕)

雨が本降りになっている。

止められてあるマウンテンバイクとスクーター。

○同・突端(夕)

雨の中に常夜灯が立っている。

その先にレインウェアを着た優と杏が灰色の海を望んで立っている。

杏「(めん。やっぱりわからへん」

優「……」

杏「怒ってる?」

優「(鼻で笑い) とりあえず明日大野亀まで行くしかねえな」

歩き出す優。

杏「行く気になってくれたん!」

優「(杏に背を向けたまま) しょうがねえじゃん。あの人とは全然似てねえってこと証

明しなきゃなんねえもん」

杏、笑みを浮かべ優の後を追う。

○民宿・表(夜)

雨に濡れる日本家屋。

玄関に「民宿」の文字。

○同・食堂(夜)

テーブルの上には食べきれないほどの料理が並んでいる。

杏「すごい!」

優「食べ過ぎんなよ」

杏「わかってるわ」

と、おかみ(60)が顔を出す。

なぜか昼の定食屋の旦那にそっくり。

優「あれ、定食屋の旦那？」

おかみ「え？」

杏「ごめんなさい、こっちの話です」

優「そっくりじゃん。てか本人じゃん」

杏「(笑いを噛み殺して) あほ。そんな訳ないやろ」

杏、優の頭をはたく。

優「いってえなあ。自分だつてうけてんじゃん」

おかみ「まあまあ、お客さん。御飯がさめないうちに、ね」

おかみ、御飯をよそつて二人に出す。

おかみ「佐渡の米はね…」

優「日本一って言うんでしょ」

杏、思わず吹き出す。

優「やっぱり」

きよとんとするおかみ。

### ○同・客室(夜)

豆電球の灯りの下、布団に並んで寝ている優と杏。

杏「もう寝てる？」

優「(耳栓をはずし) なんだよ」

杏「あんたにひとつだけ謝つとこ思て」

優「あんたが一人だつてことかよ」

杏「なんで？ あ、あんた、黙ってビデオ見たん？」

優「そっちだつて嘘ついてたんだろ」

杏「むかつくなあ。わかった、もうええ」

杏、電灯のヒモを引く。

真っ暗になる。

と、優がヒモを三度続けて引き豆電球に戻す。

杏「なにすんの！」

優「真っ暗だと眠れねえの」

杏「テントで寝る時は真っ暗にしてるやん」

杏、またヒモを引く。

真っ暗に。

優、またヒモを三度引き豆電球に。

優「家ん中は別なんだよ」

杏「あ、そ。勝手にし！」

杏、優に背を向ける。

優も杏に背を向ける。

二人、それぞれ目の前の壁を見つめているが

優「なあ」

杏「なに」

優「眠れねえから言えよ」

杏「それが人にお願ひする物の言い方？」

優「言ってください」

杏「（鼻で笑い）しゃあない。ほな言つたげる。私の母親はな、ほんまはもうとつくに死んでんねんって話」

優、慌てて杏のほうへ向き直る。

杏は背を向けたまま。

杏「おとといの電話も嘘。お店休むって電話してただけ」

優「なんで嘘ついたんだよ」

杏「なんでやる。同情とかされんの、いややったしかな」

優「いつだよ。亡くなったの」

杏「六年前」

優「えっ、六年前って……」

杏「そ。そういうこと」

優「……」

杏「お母さんが病気で長いことないってわかった時、あの人が帰ってきてん。最期くらい一緒にいたる言うて……。私は反発したけど、お母さんは喜んでたわ。ほんま好きやったんやね、あの人のこと」

優「……」

杏「お母さんが死んでからは、あの人とは別れて暮らしてきた。意地でも一人で生きてるって。そやから、あの人が死んでもなんにも変わらへん。前からずっと一人でやってきたんやもん」

優「……」

杏「ああ、すつきりした。これで明日気持ちよう走れるわ。てことで、おやすみ」

優「（杏の背を見つめたまま）……」

と、突然杏の背中が震え出す。

優「！」

杏、背を向けたまま。

杏「（涙声で）はよ耳栓して」

布団を頭まですっぽり被る杏。

優「……」

○同・表（朝）

雨が降り続けている。

レインウェアを着た優と杏がそれぞれマウンテンバイクとスクーターを押して出てくる。

杏、スクーターのエンジンをかけようとするが、かからない。顔を見合わず優と杏。

○バイク屋・表

開け放たれた店。

ツナギを着た店の親父（60）が杏のスクーターを見ている。

それをじっと見守っている優と杏。

顔を上げる親父。なぜか民宿のおかみと顔がそっくり。

杏「あ！ 民宿のおかみさん」

親父「おかみさん？」

優「ああ、気にしないでください。それよりどうっすか、スクーター」

親父「すぐには直んね。三日四日預けてってくれ」

杏「ええっ！ なんとかならへんの？」

親父「無茶言わんでくれ」

優「じゃあ、今日一日だけ貸してもらえる単車かなんかないっすか」

親父「うーん、あれしかねえなあ」

親父の指差す方には、ぼろぼろのママチャリが置き去りにされてある。

○海沿いの道

雨の中疾走してくるマウンテンバイクの優、速度を落としながら背後を振り返る。

水しぶきを上げながら杏がママチャリに乗って走ってくる。

優「おせーよ」

杏「あんた鬼か！」

優「しょうがねえだろ。あんた、俺のチャリ足届かねえつつんだから」

杏「……」

優「荷物は全部俺が持ってんだ。他にどうしろって……」

杏「もうええわ！」

がに股漕ぎで優を追い抜いていく杏。

優、苦笑し優の後を追う。

○屏風のように立ちはだかる断崖

それを斜めに切った跡のように一本の道が延びている。  
その道をゆっくりと進んでいくふたつの影。

○上り坂

それぞれの自転車を押し歩く優と杏。  
二人ともレインウェアこそ着ているが、顔はびしょ濡れ。激しい息遣いで黙ったままチャリを押ししていく。

○下り坂

聞こえてくる杏の絶叫。  
次の瞬間ママチャリの杏がカーブを曲がって飛び出してくる。  
続いてマウンテンバイクの優。  
二人、水しぶきを上げながら風のように駆け降りていく。  
その先、海岸線の向こうに大野亀が姿を現わす。

○大野亀・駐車場(夕)

いつの間にか雨は止んでいる。  
停車しているマウンテンバイクとママチャリ。  
空を見上げている優と杏。

杏「あれ？」

優「ああ」

杏「あんた一人で見てきいひん？」

優「ざけんな」

二人の視線の先には空に向かってそびえている岩山・大野亀。

○同・登山道(夕)

息を切らして登ってくる優と杏。

ぬかるみを踏みしめてきて、足元はもう泥まみれだ。

杏「まだ？」

優「まだ」

杏「くそ！」

優「ああ、くそだ！」

杏「くそ！」

優「くそ！」

二人、交互に喚きながら登っていく。  
雲の切れ間から夕日が差してくる。

○同・頂上(夕)

夕日を受けて雨上がりの草原が光っている。

そこへ、汗だらけ泥まみれになりながら優と杏が登ってくる。

杏「(息を切らしながら)着いた?」

優「(同じく息を切らしながら)たぶんな」

夕日に輝く海が二人の視界いっぱい広がる。

優「どうだよ」

杏「わからへん」

優「もしここなら、絶対なにかある」

杏「なにかあって」

優「なにかだよ!」

二人、辺りを見回す。

草原が続くだけ。

と、突然弾かれたように駆け出す優。

杏「なに?」

杏も慌てて優の後を追う。

優、低木の前で立ち止まる。

続いて杏。

目の前の低木は膝丈くらいの高さ。幹に黄色い布が巻いてある。

杏「これ」

優「たぶんな」

優、背中のデイバックからスコップを取り出し木の根元を掘り始める。

杏もしゃがみ込み優を見守る。

掘られていく地面。

土の中から金色のカンカンが姿を現わす。

杏「出てきた!」

掘り出されるカンカン。

優、カンカンに付いた土を払う。

杏「はよ開け!」

優「わかってんだよ!」

優の手で開けられるカンカン。

中には二通の預金通帳が。



顔を見合わせる優と杏。

優、自分の名前の書かれた方の通帳を手に取りゆっくり中を開ける。

優「(見て)！」

平成二年十月八日から毎年十月八日に100000の数字がきれいに並んでいる。

杏の声「おんなじ」

顔を上げる優。

杏が自分の通帳を差し出し出てくる。

昭和五十七年八月二日から毎年八月二日に100000の数字がきれいに並んでいる。

優「なんだよ、これ。手が込んでた割にお宝自体普通じゃん」

杏「(頷き)けど、気持ちわかる」

優「どこがだよ。これじゃあ、普通の親父と変わんねえじゃねえか」

杏「ええやん。普通のもん、遺したかったんよ。最期くらい……」

優「……」

杏「(微笑み)……」

優、突然駆け出す。

杏「ちよっと！」

断崖に立つ優、地図を取り出し、海に向かって思いきり放り投げる。

優「ざまあみろ！」

地図が海に向かって落ちていく。

優「お宝！ 掘り出したぞー」

杏も優のもとへ駆け寄る。

杏「そーや！ ざまあみろや！」

優「(さつきより大声で) ざまあみろ！」

杏「(負けずに大声で) ざまあみろや！」

優「(ふっと笑い)……」

杏「(同じくふっと笑う)……」

優の声「姉の笑顔を見ながら、俺はほんのお宝がなにかわかったような気がした」

海に目を戻す優。

いつの間にか、星を横一線に並べたように水平線が輝き始めている。

○両津港・フェリー埠頭(朝)

出航目前のフェリー、次々と車が乗船していく。

その傍らに優と杏。

二人のそばにはマウンテンバイクとママチャリが停められている。

優「大丈夫かよ、一人で」

杏「うん」

優「バイク屋によろしくな」

杏「わかってる」

優「じゃあ」

杏「……」

優、マウンテンバイクを押しフェリーに向かって歩き出す。

杏の声「なあ！」

優「(振り返り) あ？」

杏「……なんでもない」

溜め息をつき、再び歩き出す優。

杏の声「なあ！」

優「(振り返り) なんだよ！」

杏「なんでもない！ はよ行き！」

優「ったく。訳わかんね」

歩き出す優、はっとして振り返る。

優「わかった！ 誕生日おめでとうだろ！」

杏「あほ。一日早いわ」

優「なんでよ、今日八月二日だろ」

杏「あの通帳が間違ってるの。私の誕生日は八月三日！」

優「(ぶっと吹き出し) マジ？」

杏「マジ」

優「ひでえ親父」

二人、げらげら笑い合うがすぐに黙り込んでしまう。

優「じゃあ、今度こそほんとに……」

杏「なあ！」

優「あ？」

杏「あんたが見送って」

優「はあ？ 逆だろ、普通」

杏「ええやん。特別バージョン」

優「……ったく」

杏、ママチャリに跨がる。

杏「ほな」

優「ああ」

ママチャリの杏、走り出す。

優「……」

走っていくママチャリの杏。

杏「(振り返らず) ありがとう！」

優「!」

杏「(振り返らず) ほんまに、ほんまにありがとう！」

小さくなっていく杏の姿。

優、溢れ出る涙を慌てて拭い

優「いつでも! いつでも連絡してこい！」

杏、手をひらひら振りながら走り去っていく。

優「……あほ」

杏が見えなくなるまで見送る優。

優の声「こうして俺達のお宝さがしは終わった、はずだった」

携帯電話のコール音。

○フェリー・甲板(朝)

ベンチで放心している優、コール音に気づき携帯電話を手にする。

優「もしもし」

杏の声「帰ってきて」

優「は？」

杏の声「財布落としたみたいやねん」

優「はあ？」

杏の声「カードもなにもかも全部やねん」

優「ってか、もう船出んだよ」

杏の声「頼むわ！」

優「ったく! このばか姉貴！」

出航の音楽が流れ出す中、慌てて駆け出していく優。怒っているが、なぜか

いきいきしているようで……。

(おわり)

# お宝探し

2014年3月27日 発行

著者 坂東誠一

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵

郵便番号 135-0016

東京都江東区東陽1-28-13-401

お問い合わせ [oozara.lee@ka-kuzo.jp](mailto:oozara.lee@ka-kuzo.jp)

サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。